

オバシギ *Calidris tenuirostris* (Horsfield)

【選定理由】

シベリアの東北部のみで繁殖し、インドから東南アジアやオーストラリアのみで越冬する極東の固有種である。近縁種のコオバシギに比べれば比較的数の多い種であるが、世界的にみれば個体数の少ない種であり、地球上での分布が狭いことで絶滅の危険が高くなっている。愛知県鳥類生息調査地点の中で現在も本種の観察記録があるのは「汐川河口」「矢作川河口」「庄内川河口」の3地点のみで、全て干潟の環境を含んでいる。県内の干潟では貧酸素の問題や、過去にはなかった窒素・リンの不足による貧栄養問題などが発生しており、餌となる干潟の生物が減少している。

【形態】

全長 26～28cm、翼開長 62～66cm。夏羽は上面が黒褐色で灰色の羽縁があり、肩羽は赤褐色。頭中央から頸にかけて灰色で細かい縦斑があり、下面は白く胸と脇に大きな黒色の斑がある。冬羽は、上面が一様な灰褐色で、頭から胸にかけて細かい縦斑があり、不明瞭な白い眉斑がある。幼羽は、上面が暗褐色で淡褐色の羽縁があり、胸に太くて明瞭な縦斑がある。嘴は黒く基部は太め、脚は暗緑色。飛翔時は、腰が白く見える。



愛知県西尾市, 2008年7月13日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の干潟に生息する。飛来数は、春の成鳥に比べ秋の幼鳥の方が多い。

【国内の分布】

北海道から沖縄にかけて、春と秋の渡り時期に渡来する。

【世界の分布】

シベリア東北部で繁殖し、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

春秋の渡りで伊勢・三河湾の干潟に飛来するが、満潮時には後背地である近隣の干拓地や埋立地で採餌や休息をする。干潟に依存して生息する種であり、海域から離れた場所に飛来することはきわめて希である。県内における内陸での記録は、愛知県鳥類生息調査地点の「鍋田」で1973年の秋まで、「木曽川玉ノ井」では1981年の春までに合計4例4羽だけであり、西三河野鳥の会の記録では1995年9月に、安城台地の水田で1群3羽の記録があるのみである。春は4月上旬から5月、秋は8月から10月干潟に飛来し、数羽から数十羽の群れで主に干潟でゴカイや貝類等を捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の主な飛来地として、藤前・庄内川河口干潟、一色干潟周辺、豊川河口周辺、汐川干潟、福江・伊川津周辺などがあげられる。過去の県内には他にも環境の良い大小の干潟が各所に存在しており、当時の正確な生息数は不明であるが、そうした干潟からは全て姿を消している。秋の渡りは幼鳥が大半を占めるが、現在の飛来数は県内全体で多い年でも30羽程度と推測される。

【特記事項】

標識調査の結果によると、県内に飛来する本種成鳥の越冬地はオーストラリアの東岸である。

【保全上の留意点】

残されている干潟や湿地を保全するとともに、漁業振興の観点からも、海や干潟の貧栄養問題について真剣に取り組むことが求められている。

本種は、種の保存法で国際希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.136. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)